

# 白選五十一首



石田比呂志

無頼よと子を譏られて来し母が昼過ぎて畑を打ちはじめたり

〔無用の歌〕

抱き来し女の肩を放したる用なき腕を垂らして帰る

びんぼうにまけることなくいいうたをつくりますのできたいくだけされ

前ゆくは孤独<sup>なりわい</sup>哀愁のチャップリン吾は大根提げて歩めり

生業はかくも美<sup>は</sup>しきか如月<sup>さくらぎ</sup>の豆腐を水より掬<sup>は</sup>いているも

自らの二つのふぐりしみじみと垂れおりついに無名なるかな

〔怨歌集〕

五尺四寸十四貫五百石田君四十二歳無益<sup>むやく</sup>の歌人

〔蟬聲集〕

その浮力奪われながらゆつくりと引き下ろさるる春の気球は

材木に艶めくまでに食いこみて鋸の背中は沈みゆくなり

カーテンをだらんと垂らしお日さまに会わせる顔がないのである

水さえや鋼光<sup>はかねこう</sup>なし命濃し筑紫次郎を越えつつあれば

〔琅玕〕

昭和十九年、旧制中学二年一学期で学校を

首になって炭鉱に徴用されたり、特攻隊に志願したりしているうちに敗戦。いっそヤ

クザにでもなるかと片足突っ込みかけた十

六歳の私の手は、どういう訳か石川啄木の

『二握の砂』を握っていた。溺れる者は藁を

も掴むの譬え通り、その偶然の一縷の糸に

縋って五十余年、一度も正業につかず、工

員、旅館番頭、行商人、キャバレー管理人

兼掃除夫等を転々して短歌一筋、二足の草

鞋を穿かぬことを唯一の誇りに天路歷程を

踏破して来たわが両足をひとりこっそり撫

でてやりたい。

人間には、人の敷いたレールの上を走る

人間と、自分の敷いたレールの上しか歩け

ない人間とがある。また、道の真ん中を歩

前をゆく犬のふぐりと提げて持つ鯖の頭に塵秋風来じんしゅうふうらい

旃陀羅が子も人だから眼より泪のごときもの落ちにけり

ディレツタンチズムの徒輩たるとも歌をして現実の用足らしむるなよ

この国の貧しきひとに生れ来て歌作る今宵涙とどまらず

伐られたる木がゆつくりと倒れゆき土の面に木の影は消ゆ

風薫る春の昼過ぎいずかたへ向けて屠ほふられにゆく豚の尻

七輪に作る炎ののぼる路地男を叱る女の声す

大根の首切り落すはずみにて首斬り浅右衛門のことを思いぬ

安売りの札つけられている魚の前に立ちおりなるほどなるほど

行く秋や夢より醒めしみどり子がほやりと笑う運命の笑い

少わかきより修羅妄執がなかに生き愛らしくなき齡となりぬ

熱爛の酒くる待ちているあいだ辛子蓮根の穴覗きおり

秋霖の到らむ夜半か闕いし無頼派ひとり古りにけるかも

蟻ひとつ夜の昼にあらわれて古き聖ひじりのごとくに歩く

花柄の傘をたたみて濡れて来しわが晩年の素足を拭ぬぐう

ゆうぐれの新幹線に忘れ来し万年筆はいずこゆくらむ

排水の水しみじみと呟つぶやきて人間界を離れてゆけり

離脱してゆく雲みれば一片いっぺんの雲に万里の志あり

心臓のようにぼつんと暗闇にご飯いたく灯が点っている

しぐれ傘一輪咲かせむらさきに烟る坂路さかしにさしかかりたり

〔長酣集〕

〔鶏肋〕

〔滴滴〕

〔九州の傘〕

く人間と、真ん中を歩くと踏み潰されるので、道の端っこを歩く知恵を身につけた人間とがあつて、俺はどっちも後の方だと粋がついているうちに人生すつかり行き暮れて気がついたら七十歳になつてしまつていた。その上自慢じゃないがこの年になつて家も妻子も無く、金も職も無い、地位や名譽もとよりあろう筈は無く、こんな阿呆は俺一人だと威張つてみても笑われるだけ、早く足を洗つて人並みの暮らしてや出世がしてみたいと何度涙ながらに夢見たことか。が、その都度、身にしみついた学歴コンプレックスとひねくれが邪魔をした。もともと大企業には近寄れる身分ではないし、さりとて平凡なサラリーマンやるだけの根性も度胸も無い。されば裸一貫、禪一丁の男勝負、短歌の世界で生きるしかないのであるからしてというのが実情。が短歌は私の才能以上の楽しい夢を一杯見させてくれた。失くした物も多いが、差し引きお釣りがくる程の幸せをも呉れた。人間、欲しい物を手に入れるにはそれ相応の物を犠牲にしなければならぬ。あと何年生きるか知れぬが、今後トゲのある門松を幾つか潜らせて貰いながら、神棚の短歌大明神に朝夕の礼拝を欠かす事なく、身長たつた三十一種の短歌に殉じていきたい。(いしだ・ひろし「牙」)

九州にひとり紡げる歌詠みの頭を風が撫でてゆきたり  
雪ふれる動物園に来てわれは赤き猿の尻見て帰る

旅費記載なければ

中曾根ノ大臣ヨリ来シ招待状 欠ノ字罫ムワレ慇懃ニ

極月の家賃払うと通い帳さげてひよこひよこ行く石田さん

滾る湯にその身採まれて浮沈する熬子は生まれながらに熬子

「子子」

男ならこれだけは覚えておくがよい一高東大珍宝古はここ

骨くらいせめて綺麗にしておかむ今日は為朝百合がひらきぬ

手に触るるものみなこの世の温みもつ譬えば茶碗右の手の箸

紙芝居屋ももう日が暮れて自転車のパタルを踏んで帰っていった

「忘八」

清らなる処女の乳房に接吻す夢許されよ六十一歳

物陰に潜み目合する猫のかの恋愛もあな寒ざむし

忽然として硬骨の百舌一羽霜枝踏まえて鳴きにけらずや

われの腕離れし時計休みなさい夜もふけたればもう休みなさい

天国は天氣がよいと呼ぶけれど地獄は仲間が多いから好き

今日もまた競輪ですか電線の雀が声を揃えて言えり

「涙壺」

両の耳澄ませば蚯蚓鳴く声す同情論など一切無用

小生は清く正しく美しく生きて来たとは言っています

青香母酸絞れば酸ゆく思い出づむかし夜汽車に乗り後れたり

誰もいぬことは分っておるちゆうに「今、帰った」と口より洩るる